

杉幹のおちゆく窓にわれは居てケーブルカーは比叡を攀づる
遠方きよたに帆舟うかべるうなばらは琵琶湖にあらしひろびろしかも（山頂より遠望）
みつるぎの鎮ちもりませる宮居にてすめらをこの武運を祈る（熱田神宮）

生活煩惱

辰 巳 紫

兄 渡 満 す

滿洲にゆく汽車ぬちに書けるこの兄の歎きにふるゝ心地す
大陸の土ふまへたりと書き出しの文字はきほひて紙背に透る
我よりは意志つよき兄とおもへども異國のたつきいかにあらむ
盛んなる心とのみは受けとれず海越へ來たる兄の便りに
大陸の土となるとも悔いずとふかたき心は放ちたまふな
老らくの身にしたつきを負ひませど長兄が事ほめて云はしぬ（父母を訪ふ）
ひさびさに母を訪へば老らくの微笑はいたくわれをなかしむ
常ならぬ世といふからに零落の生活はも父が慣れしとぞ宣る
うつろなる笑みなるからにふと見れば父の瞳に光るものありき

の邊は相當の高きにあるので夏でも大變涼しく避暑にはよい場所であるといふ、いつしか雨も止んでゐた、水上の驛では降客も多かつた、電氣機關車に替へる爲大分停車時間があつたので私は外に出た、風は冷たかつた、いかにも高原といふ風な感じである。

清水トンネルに入る、汽車は後にゆくにつれ段々に曲つてゐた有名なループ式である、しばらくしてトンネルを抜けると今入つて來た所が左の窓よりすぐ下に見える。

越後へ入るともう天氣はすつかり晴れて午後の日はいやといふ程暑く照りつけた。

越後平野に入る。海岸と思はれる方は一面に松林が續いてゐる、彌彦山を遠く望んで汽車はどこ迄も續く稲田の中を新潟へ向つて走つてゐた。（中三）

故郷の夜

井 上 龍 榮

晝間の暑さに比べて夜は、すこし寒さが

父母を呼ぶことなくて育ち來し我が心根もさびしくたけぬ(叔父に育てられて)
時折りに里子のわれを訪ひし此の母に似し乙女ひよは思ほゆ (姉)

朝日新聞にのりし行方不明の妙子チャンの父

中山政成先生は我が小學生時代の師なり

ひたむきな心かられ己が來しみちは知らずとのたまふものを (その夫人)
たらちねの己れ責めたて逝きませるひとの購ひし昇汞水あわれ (責を負ふて
逝く)

出征兵士の兒誤つて濁流に落ち死す

釣竿ははなさぬまゝに浮き上りすでにつめたくなりて居しとふ
その父にかはりて死にし子をほめて言ひつゝ泣きぬ肩ふるはせて (その母)

秋の旅

石切りの鋭き音さえくる山あひの静寂をはひて霧上りゆく
千仞をかけたわたす橋ゆかむとしのぞく溪間に水光る見ゆ
山かけに沈まむとする太陽の炎に燃えて空は夕やけ
峽空の眞澄にたちてひとすじの煙か白し炭出しの櫓
旅ゆけば秋たそがれて炭小屋の漏灯つめたし峠路の風

身にしみる。話に聞く熱帯の夜の感じだ。
坐つて机に向つてゐても何だか足先がいや
にこちけてくる、初秋の夜の感が一入せま
つてくる。

時計は十時を打つた。僕は前から休暇中
の代敷宿題に無中になつてゐる。その沈黙
の中から流れて來る蓄音機の音があたりの
静かな空氣を透して微かに聞えてくる。何
の歌だかはずきりしない。僕はふと難問に
ぶつかつた。解けぬ。いくら考へても解け
ない。時計はようしやなくなつて行く。突
然碇船中の梅勢丸の汽笛が力強く鳴り響く
僕は一心に考へ續けた。ものゝ三十分もた
つた頃、問題は漸く解けた。ほつとして時
計を見ると將に十一時を報じようとしてゐ
る。そばに眠つてゐる誰を見ても氣持良さ
そうに夢路をたどつてゐる様だ。

僕は急いで机を片付けた。いつの間にか
蓄音機の音は止んで、あたりはひつそりとし
て物寂しく静まりかへつてゐる。何の物
音もしない、裏へ出た。月はやゝ薄く地上
を照し、柿の木の影をぼんやりと庭に映じ